

## 「聖学院の使命」

### ペトロの手紙一 4章7～10節

聖学院中学校高等学校チャプレン 久保 哲哉

万物の終わりが迫っています。だから、思慮深くふるまい、身を慎んで、よく祈りなさい。何よりもまず、心を込めて愛し合いなさい。愛は多くの罪を覆うからです。不平を言わずにもてなし合いなさい。あなたがたはそれぞれ、賜物を授かっているのですから、神のさまざまな恵みの善い管理者として、その賜物を生かして互いに仕えなさい。

(ペトロの手紙一 4章7～10節)

今回の研修のテーマは「ハラスメント」です。このあと「ハラスメントとは何か」の具体的な研修を受けることとなります。これに先立ちまして、この開会礼拝で注目したいこと。それは、私たち聖学院の建学の精神についてです。なぜ建学の精神に立ち帰るのか。建学の精神には、私たち聖学院がどのような使命・自らの存在意義を持ち、どのような人間観・世界観に立って教育を行うか。どのようにして社会的使命を果たすことをビジョンとしているか等々が示されています。ハラスメントの撲滅。SDGsの取り組み等々。今、様々なことが教育に求められています。私たち聖学院の建学の精神に立ち返ることがこれら諸問題に解決を見いだす秘訣であり、私たちの幸いにつながるの確信があります。これらを共有し、私たちが一つとなっていくことが、日々の教育の営み、ひいては経営戦略になくはならないものだとの認識があるのです。

それでは、私たち聖学院精神。その根っこはどこにあるのでしょうか。本校の初代校長の石川角次郎先生は本校創立の「20年回顧」という文章の中で、聖学院の名付けの由来について、以下のように紹介しました。

「聖学院の理想は聖人を養成することである」

「20年回顧」(『権陵』第10号)より

ここに、私たちの最初のヴィジョンがあります。そして、これを受け、1936年。聖学院中高校歌が制定されました。

二節「学友むつみ 師弟なごむ はえある気風 おほしたてて 愛と奉仕の 園をつくる これぞ我らの日ごとの作業」

三節「ここにて学ぶ真・善・美を 一つの聖にすべくくりて 神と人とにささげつくす これぞわれらの 貴

## き使命」

この校歌では、聖学院の使命について、私たちこの身体を「神と人ともに献げ尽くす」ことで、この世界を「愛と奉仕の園」とする示されています。なお、同じ年に女子聖学院の校歌も制定されまして、そこで「虔(つつま)しき 心をもて 神を仰ぎ/温かなる 思いをもて 人に仕(つか)う。」と歌います。

それぞれ表現は違いますが、当初の聖学院のヴィジョン。「聖人となる」という言葉を時代に合わせた言葉にしたのでしょう。聖学(聖書の教え)」を学ぶことで、暖かなる思い。愛をもって社会、世界に奉仕する。そのことで、この世界を愛と奉仕の園とする。聖学院はそのような人格の人間を育てたいということがよく歌われています。100年以上の昔からこのような思考・発想で教育を行ってきた聖学院を誇りに思うものです。

そして、1980年4月～2000年3月まで本校の校長を務めた林田秀彦先生の言葉にも注目したいのです。林田先生は言いました。

「聖学院教育は、ナンバーワン志向型ではなく、オンリーワン志向なのです。それは、絶対者なる神の前にかげがえのないオンリーワン(唯一)の人格としてその命の尊厳を認め、個々に与えられている賜物(タレント・カリスマ)を見だし、周りの誰とも比べることのできないタレント(才能)を発揮せしめる教育なのです。それは『聖学院精神の高揚』といえるでしょう。」

『ベルタワーの響き』より

聖書は人間について「神にかたどって創造された(創世記 1 章 27 節)」と語ります。神が唯一の方である。その故に、神にかたどって造られた私たちも、神と同じ唯一の賜物があるのです。神の聖性。これを発揮せしめる教育。それが聖学院中高が大切にしてきたオンリーワン教育です。

さらに、林田先生はそれぞれの賜物を認識し、その違いを識別することから、「異なる相手を認め、尊敬し、愛し合う関係」が生まれること。そしてそのような共同体は「いじめ、暴力、差別から守られる共同体となります」とも同著にて語っています。

それで興味深いのは、今日の聖書箇所では、各々が賜物を用いて、仕え合うことが求められているのと同時に、その具体的な方法として、「心を込めて愛し合いなさい( I ペトロ 4 章 8 節)」と記されていることです。この「心を込めて」という言葉はギリシャ語で「ἐκτενῶς(エクテノース)」といい、これは「持続して」とか「十分に広げる」という意味があります。きっとエクステンションの語源なのでしょう。

私たちはこのエクステンションを、他者や世界に貢献するための価値づくりや課題解決(Extensions)と教育の中に位置づけています。そしてその根底は「神を仰ぐ」ことによって私たちには賜物がある(オンリーワンである)ことを認識することから始まり、心を込めて愛し合うこと。つまり「人に仕う」という方向性が与えられて初めて花開くのだと考えています。そして、この林田先生の言葉の言葉を受け継ぐ形で、2002年に以下の聖学院憲章・聖学院教育の理念が制定されたのだと想像します。

[聖学院教育の理念]

聖学院は、一人ひとりが神からかけがえのない賜物を与えられているという確信に基づき、それぞれの固有な賜物を発見することを助け、個人の人格の完成へ導く教育をします。聖学院教育はナンバーワン教育ではなく、オンリーワン教育であり、そしてそれはオンリーワン・フォー・アザーズ(他者のために生きる個人)の教育です。

(聖学院憲章より)

建学の精神に示された「神を仰ぎ 人に仕う」こと。つまりそれぞれの「Only One」賜物を用いて、「for Others」他者のために、働くことで、この世界の課題を解決し、愛と平和を実現する人。そして、この世界を愛と奉仕の園とする。そのような人を世に送り出すこと。これが聖学院のヴィジョンでしょう。

主なる神の助けによって心を込めて愛を実践し、互いに仕え合う関係性の中に、いじめ、差別。ハラスメントは起こりません。戦争もまた然りです。建学の精神に立ち返ることが、それぞれの時代における課題解決の秘訣となります。

2022年8月28日 聖学院中学校高等学校 教職員研修会開会礼拝